

レポート作成とレファレンス資料の利用

石 橋 民 生

Preparing papers and the use of reference books

Tamio Ishibashi

はじめに

私見によれば、図書館のレファレンス業務は、現在のところ、レポート作成を準備する人びとの必要に応じる、という観点からすると、不十分である。むしろ、図書館界は、そこまで踏み込むことを、みずから規制してきたようにさえ見える。しかしながら、今後のレファレンス業務の発展を考えると、この面でのレファレンス業務の拡充がどうしても必要であるように思われる。以下、レファレンス資料の分類、という問題をどうして、この点を考えてみたい。

1. レファレンス資料の種類

1.1 レファレンス資料の分類

レファレンス資料は、初学者にとって、学習しづらいものである。その理由は、レファレンス資料そのものが、書誌とか索引とか、抽象的な性格の資料であることであり、また、レファレンス資料の種類が多さである。

いま、日本の図書館情報学の総力を結集したといっても過言でない『図書館情報学ハンドブック』⁽¹⁾を見ると、レファレンス資料は、その内容から、案内指示的レファレンス資料と事実解說的レファレンス資料に大別される。案内指示的レファレンス資料とは、求める情報の文献を探すための資料であり、事実解說的レファレンス資料とは、求める情報の回答そのものを提供する資料である。⁽²⁾

同書では、レファレンス資料の種類として、以下のものが挙げられている。

- ①書誌と目録
- ②索引と抄録
- ③辞書と事典
- ④その他のレファレンス資料
- ⑤レファレンス資料の検索ツール

このうち①、②、⑤は案内指示的レファレンス資料と考えられ、③、④は事実解說的レファレンス資料であると考えられる。⁽³⁾

「①書誌と目録」のうち書誌は、一次書誌と二次書誌に分けられ、一次書誌として3種類が挙げられ、二次書誌として8種類が挙げられている。⁽⁴⁾

目録は4種類が挙げられている。⁽⁵⁾

同様に、「②索引と抄録」は一括して4種類に分けられ、そのうちの記事索引として5種類が挙げられている。⁽⁶⁾

「③辞書・事典」は3種類に分けられ、そのうち、さいしょの項目である辞書は一般辞書と

特殊辞書に分割され、特殊辞書には16種類が数えられている。辞書・事典の2番目の項目である百科事典は、国内、国外の主なものが挙げられており、3番目の項目である専門事典は、さすがに多すぎるからか、そのうちのごく少数のものが挙げられているだけである。⁽⁷⁾

「④その他のレファレンス資料」は11種類に分けられ、そのうちの名鑑についてはさらに4種類が挙げられている。⁽⁸⁾

「⑤レファレンス資料の検索ツール」は3種に分けられている。⁽⁹⁾

以上の分類は、レファレンス資料の種類の分類であって、一つ一つの分類のなかには、具体的な個々の資料が含まれているのはもちろんである。これだけの種類のレファレンス資料を前にして、さらに個々の資料を覚えなければならないのである。初学者が、レファレンス資料の種類の多さに圧倒されるのも、無理もないといえよう。

1.2 分類上の問題点

このように、レファレンス資料というものは、種類が多い。しかし、上記の分類には、すこし問題もあるように思われ、このことがよけいにレファレンス資料の理解を困難にしているようにみえる。

(1) 用語上の問題点

たとえば、書誌と目録の区別、索引と抄録の区別など、同じ性質のレファレンス資料をまったく別の種類の資料のようにカウントしてある。書誌と目録の区別は、書誌データだけか、それとも書誌データに所蔵データが付加されているかどうかという区別だけであり、どちらも図書や雑誌のリストであるという点では同じである。もちろん、両者を概念的に区別することの意義を否定するわけではない。私の言っているのは、そのことにより、両者が同じ性質の資料であることが不明にされ、初学者にとってはそれだけ理解しにくいものになるということなのである。

索引と抄録の区別も、同様に、記事の書誌データに、その記事の要約という書誌事項が付加されているかどうかという区別だけであり、どちらも索引という点からすれば、同じ性質の資料である。初学者にとっては、どちらも同じ索引であるということを理解することのほうが重要であり、一部の索引には抄録がついている種類のものがある、ということでよいわけである。

どちらの場合も、レファレンス資料の専門的分類を強調するため、その結果、初学者の理解が妨げられているようにみえる事例である。

(2) 総記的資料と専門主題的資料の混在

上記の『図書館情報学ハンドブック』の場合には、たとえば地名事典とか年表などは、「④その他のレファレンス資料」に分類されている。ここで自然に生じる疑問は、これらの資料は、「④その他のレファレンス資料」に分類すべきであろうか、それとも、「③辞書・事典」に分類すべきであろうか、という疑問である。たしかに、資料の形式という面からすれば、たとえば地名事典は地理学事典とは別種の資料であり、年表は歴史事典とは別種の資料であるといえなくもない。⁽¹⁰⁾しかし、地名事典の分類を考えると、われわれは、まず地理学を思い描くであろうか、それとも、地名事典であるから総記的資料であると考えているであろうか。通常は、地名事典は地理学の分野の資料であると考えているのではあるまいか。同じ様に、年表については歴史、法令集については法律の学問分野をまず考えるのではあるまいか。このように考えるのは、われわれが、資料の主題内容がどの学問分野に属するか、ということをもまず想像するからである。

「その他のレファレンス資料」として挙げられている資料を、今一度見ていただきたい。それは、年鑑・年表・要覧・便覧・法令集・白書・地名事典・地図帳、図鑑、名鑑など、いずれも、一般の図書資料に比較して、その形式に特徴のあるものばかりである。いなむしろ、このような形式的特徴をもつ資料を、レファレンス資料として、その主題内容にかかわらず、分類してあるわけである。

このように、ここでは資料の形式的側面に着目した分類が行なわれているのであるが、この点にも、図書館情報学的こだわりが強く出ているといえるのではあるまいか。

(3) さらに、注8で述べた「名鑑の名鑑」の分類がある。「名鑑の名鑑」は、なぜ、「その他のレファレンス資料」に分類され、「レファレンス資料の検索ツール」に分類されないのだろうか。思うにこれは、「名鑑の名鑑」が、名鑑という一特定種類のレファレンス資料を検索するツールに過ぎないということでもあろうか。というのも、「レファレンス資料の検索ツール」に挙げられている資料をみると、主題分野を問わないものが多く、この点に関しては、「名鑑」という特定分野(?)の資料を対象とする「名鑑の名鑑」と区別される理由があるとみなされているのかもしれない。

1.3 学習方法

さて、このように多種多様なレファレンス資料をマスターし、どんな質問に対しても、その回答が記述してあると思われる具体的な資料が頭に浮かぶように訓練するには、普通、その方法としては、経験あるのみ、ということになる。

初心者がレファレンス担当で配属され、あまり迷わないで、質問に回答できるようになるには、通常2年から3年の期間が必要である。この訓練期間を経験してはじめて、どんな種類の質問が多いのか、それに対してどんなレファレンス資料が用意されているのか、レファレンス資料の見方はどうなっているのか、困ったときはどうするか、利用者に対する対応、などが学習されることになる。

もとより経験は重要であることは明らかである。しかし、それだけでなく、レファレンス資料の理解の仕方そのものに、もっと工夫の余地はないだろうか。たとえば、上記1.2で述べたような分類上の問題点を解決するだけでも、レファレンス資料の理解という点で、分かりやすくなるのではあるまいか。

2. レファレンス質問とレファレンス資料

2.1 レファレンス質問のタイプと情報源

こころみに手元にある「情報サービス概説」とか「レファレンスサービス演習」という科目のテキストを見ると、レファレンス資料の解説は、だいたい、上に述べた資料種類別の分類が最初に行なわれている。それで終わりではなく、つぎに、レファレンス質問のさまざまなタイプが取り上げられ、それぞれのタイプの質問の回答に用いられるレファレンス資料が説明されることが多い。

いまあるテキストを見ると、「レファレンス質問のタイプと情報源」というタイトルのもとに、以下の項目に分類され、回答に用いられる資料種類が示されている。¹¹⁾

①レファレンスツールのガイドを調べる

→レファレンスブックのガイド、主題文献案内、書誌の書誌

②ことば・文字を調べる

→国語辞典，漢和辞典，難読語辞典，対訳辞典，特殊辞典，諺語・名句辞典，語句索引，コンコードダンス

③事柄・事象・データを調べる

→百科事典，専門主題事典や用語集，便覧，図鑑，統計資料，法令集

④歴史・時を調べる

→歴史事典・便覧，年表，総合年鑑や専門主題年鑑，地域年鑑

⑤場所・地理・地名を調べる

→地理事典，地図帳，地名事典，旅行案内書，地域年鑑

⑥人物・団体・企業を調べる

→一般・専門人名事典，人名録，団体・機関名鑑，人物文献索引，人物書誌，難読姓名辞書，典拠録，読み方辞典，系譜・家系事典

⑦図書・出版を調べる

→略

⑧新聞・雑誌を調べる

→略

ごらんのように，ここでは，レファレンス質問を8種に分けて，それぞれの種類に対して，回答に用いるレファレンス資料が配分されている。

ここではつぎの3点を指摘しておこう。

第1に，この文類のうち①，⑦，⑧は，「案内指示的」資料であり，その他の②から⑥は，「事実解説型」の資料である，ということである。すなわち，レファレンス資料の2大区分としての「案内指示的」資料と「事実解説型」資料との分割は，ここでも採用されているわけである。

第2に，「事実解説型」の資料の内容が，ことば・文字，事柄・事象・データ，歴史・時，場所・地理・地名，人物・団体・企業，の5分野に分割されている，ということである。この分類は，レファレンス質問の分析から出てきた分類であり，図書館情報学の分野だけで用いられる独特の分類であるといえる。

第3に，この分類は図書館情報学の分野独特のものであるといっても，主題の分類であって，資料の形式の分類ではない。したがって，地名事典は地理事典と，年表は歴史事典と，同一の分類のなかに配分されている。すなわち，場所・地理・地名という主題を調べるということからすると，地名事典も地理（学）事典も，区別できないということであり，歴史・時という主題を調べるためには，年表も歴史事典も，同一範疇に属する資料であるということになる。このように，主題内容からする分類においては，資料形式は不問に付されることになる。

2.2 レファレンス質問の種類分類

さらにもうひとつの分類方法がある。これは，レファレンスの質問の内容ではなくて，質問の形式にもとづいた分類方法である。¹²⁾

この分類は，以下のようになされる。

①所蔵調査

②所在調査

③書誌事項調査

- ④事実調査
- ⑤文献調査
- ⑥調査の方法（調べ方の案内）

この分類においては、④だけが「事実解説型」の資料で回答を探す質問であり、その他は「案内指示型」の資料で回答を探す質問であるといえることができる。つまり、資料の形式であるとか、質問のタイプ（内容）であるとか、なんらかの視点に立ったうえで、「事実解説型資料」の細区分という試みは一切行なわれておらず、「事実調査」でひとまとめにされている。

この分類は、現場の図書館職員にとっては、お馴染みの分類である。それは、レファレンス業務の統計が、この分類にもとづいて集計されているからである。つまり、図書館業務としてのレファレンス業務の統計的関心から行なわれている分類である。その反面、利用者の立場からすると、ほとんど関心のもてない分類である。利用者にとっては、自分の疑問が、レファレンス業務の統計上どの分類に属するか、ということは、どうでもよいことである。

2.3 要約

このように、レファレンス資料は、通常、その資料種類によって分類され、さらにレファレンス質問のタイプ別に分類されるという形をとることが多い。さいしょに挙げた『図書館情報学ハンドブック』は、資料種類による分類のなかに、「その他のレファレンス資料」という一項目を設け、前掲2.1の②から⑥の資料の一部を、資料の形式的な側面に注目して、このなかに一括しているわけである。

つまり、1.1の分類では、辞典・事典以外のレファレンス資料を、ひとまとめにして、その形式的側面に着目して細区分を行なっているのであり、2.1の分類では、レファレンス質問のタイプという側面に注目して、こちらでは辞典・事典を含めて、配分しているのである。

それでは、「事実解説的レファレンス資料」のうちで、固有の意味で総記的と呼べる資料には、どんなものがあるだろうか。「固有の意味で総記的」とは、特定の主題にこだわることなく、多くの主題に共通する特定の視点から編集された資料、といった意味であるが、このような資料と考えられるものは、百科事典、人名事典、年鑑、名鑑ぐらいではあるまいか。人名事典は人という視点から、年鑑は年々の社会変化という視点から、名鑑は人や団体の名称という視点から、編集された資料であり、いずれも、材料の収集においてなんらかの特定の主題分野に限定されていない。

「案内指示的資料」の中心になるのは、全国書誌にしる総合目録にしる雑誌記事索引にしる、特定主題・分野に限定されない資料であるのは、当然であるが、それは、総記的であることに意義があるということにもとづいている。つまり、多くの分野の利用者によって共同的に利用されるというメリットである（他面で、特定主題分野の資料のなかにも、書誌、目録、索引などの「案内指示的資料」が存在することも、また当然なのであるが）。

一方、いま述べたように、「事実解説的資料」のなかにも、特定主題に限定するよりも総記的であることにメリットがあると認められる一部の資料が存在する（百科事典、人名事典など）。

このように、「案内指示的」レファレンス資料と「事実解説的」レファレンス資料のどちらにおいても、資料の総記的性格という特徴がみられ、この特徴があるために、レファレンス資料という資料種類の独自性が認められ、そのさまざまな分類が試みられているということ、このことが、レファレンス資料の分類や説明の複雑化、巧緻化を招き、初学者にとって分かりにくいものとなっている原因であると考えられる。

3. レポート作成とレファレンス資料

いま、手元にある『レポート作成法：インターネット時代の情報の探し方』をとりあげて、レポート作成において、レファレンス資料がどのように解説されているか、みてゆくことにしよう。⁴³一般の利用者にとっては、レファレンス資料の種類別の分類が意味をもつのは、レポートを作成したり、卒業論文を作成したりする関連性においてである。

利用者側からする、レファレンス資料にたいするこのような関心は、これまで、図書館サービスの話題としては、ほとんど取り上げられなかったのではあるまいか。図書館は、これまで、レファレンス資料の総記的特徴に着目し、その形式的分類を行ない、質問の内容を分析して、どんなタイプのレファレンス資料で回答できるかを考察し、さらに質問の形式に注目して、レファレンス業務の統計を行なってきたわけである。このような図書館の努力は、相応の成果をあげてきたし、また十分理解できるものであるが、反面、形式化、ステレオタイプ化を招き、ともすると、利用者の関心を無視して発展してきたという面も指摘されてきている。⁴⁴ 今後は、さらに利用者の側に踏み込んだサービスというものが考えられないといけなくなってくるわけである。

利用者は、レポート作成にあたり、どのようにレファレンス資料を利用しているのか、レファレンス資料の性質や役割を十分理解しているのか。こういった問題は、図書館にとっても、重要である。なぜなら、今後のサービス展開を考えるうえで無視することのできない問題であるからである（後述）。

3.1 レポート作成の5段階

これからとりあげるテキストは、図書館情報学の専門家によって作成されたものである。レポート作成のようなテーマは、一般的な課題としてとりあげようとするれば、図書館情報学の専門家によるしかないのではあるまいか。しかし、これからみてゆくように、図書館情報学の立場に立つことにもとづく危険性もあるのではあるまいか、というのが筆者の立場である。

レポート作成の段階として、以下の5段階が区別される。⁴⁵

- 段階1 テーマを決める
- 段階2 文献を探す
- 段階3 文献の入手と読み方
- 段階4 筋書きをつくる
- 段階5 レポートを書く

3.2 段階1で使用する資料

レポート作成の5段階のうち、レファレンス資料や文献探索が関係するのは、段階1と段階2である。

段階1では、まずテーマを決め、そのテーマの背景となる知識を収集し、大ざっぱな筋書きをつくること、この3点が述べられる。

テーマを決めるということは、重要な問題であり、卒業論文やレポートを作成するときにもっとも苦勞する点のひとつである。

上記テキストには述べられていないことであるが、この問題の解決にあたって、レファレンス資料を有効に利用することができる。それは、体系的に編集された専門事典の目次を利用する方法である。このような専門事典においては、その分野における重要なテーマは、過不足な

く網羅されているはずであり、しかも、その重要性に応じて（多くの場合、その文献の分量に応じて）事典のページ配分が行なわれているはずである。したがって、テーマを選ぶさいには、このような専門事典で編成された項目を利用すればよいのである。

テーマを決め、背景となる知識を収集し、筋書きをつくるという3つの仕事が、すぐれた専門事典にめぐりあうことで一挙に解決できる可能性がある。

3.3 段階2とレファレンス資料

つぎに段階2である。われわれは、今、レポートのテーマを決め、その計画書を作成した段階にいる。つぎの仕事は、文献の収集である。テキストでは、段階2は、以下の7節（AからG）で構成されているので、以下、各節の要旨を示し、必要と思われるところで、筆者のコメントを付していくことにする。

A 文献の種類

ここでは、レポート作成に必要な文献の種類が示され、簡単な説明が行なわれる。文献の種類として、図書、雑誌論文・記事、新聞記事、レポート・技術調査報告書、会議資料、視聴覚資料、Web情報が挙げられている。

筆者注：ここには当然ながら問題はない。問題は、これらの資料を調べてゆくプロセスと、各プロセスでのレファレンス資料の利用のかかわりのなかにある。

B レファレンス資料

ここでは、レファレンス資料による「組織的探索」のメリットが述べられ、つぎにレファレンス資料の2類型が示され（「書誌的資料」と「言葉や事柄についての情報を探すレファレンス資料」）⁶⁶、印刷媒体と電子媒体のあることが示される。そして、そのあとで、「レファレンス資料を探すための資料」が述べられる。

ようするに、簡単に言ってしまえば、ここでは、レファレンス資料の概説が行なわれていることになる。

筆者注：われわれは、今、レポートのテーマが決まり、文献を収集する段階にいる。どうして文献を収集するか、そのためにレファレンス資料をどう役立てるか、というのが、われわれの知りたい事柄である。これは、実質的に、つぎのDで説明される。ここでは、その前段として、レファレンス資料の概説が行なわれている。しかし、なにかはぐらかされたような印象を受ける。レファレンス資料の概説よりも、どの資料をどう使うか、という戦略的な説明がほしいのであるが、それは後回しにされるところから、このような印象が生まれる。

C 「文献カード」の作成

ここでは、文献の整理方法としての「文献カード」の作成方法が細かく説明される。

筆者注：レポート作成法のテキストとしては、当然であり、適切でもあるが、文献収集の方法とは関係がない。

D 文献探索の手順

D-1 文献探索の全体構造

ここでは以下のことが述べられる。

①OPACによる検索

自分の図書館のOPACを検索して、必要な文献を探すことである。自分が日常利用する図書館という限定された範囲の検索であること、しかし、検索結果はその図書館に所蔵されており、入手のための別の手続きを必要としない、ことが述べられる。

②書誌

NDL-OPAC（国立国会図書館の蔵書目録）の検索が述べられる。つまり、自分の図書館にない図書を、国会の蔵書目録で探すわけである。

筆者注：具体的にどう検索するかは、「E 文献探索のコツ」で示される。ここでは2点指摘したい。ひとつは、NDL-OPACの検索は、後述するように、きわめて重要な問題であるから、説明の場所を別々に（DとE）してほしくない。重要性に応じて、まとめて取り上げてほしいこと。あとひとつは、今検索しようとしているのは、文献のうち国内の、それも図書である、ということを明示してほしいことである。Aとの関連性をハッキリと示してほしいわけである。それでない、なんのために、どんな目的でNDL-OPACを検索するのか、わからなくなってしまう。

③二次書誌

分野ごとにいろいろ二次書誌があるので、それを探す。探し方は⑥で述べられる。

④雑誌記事・論文

雑誌記事索引や抄録誌で調べる。

⑤新聞記事

電子新聞のデータベースを見る。

⑥三次書誌

二次書誌を探すために三次書誌を利用する。

⑦総合目録

探した文献の所蔵図書館を調べる。

⑧図書館員の利用

書誌や目録について疑問があれば図書館員にたずねる。

D-2 参考文献リストからの探索

ここでは、「組織的」探索とならぶ文献探索のもう一つの方法である「芋づる」式の探索方法（利用した資料の引用・参考文献をてがかりにする方法）が述べられる（図書、雑誌論文の双方について）。

D-3 雑誌論文の探索手順

雑誌論文の探索方法として、『雑誌記事索引』による組織的方法と、いわゆる芋づる式の方法があることが述べられ、つづいて、書誌事項の確認法や入手方法が述べられる。

E 文献探索のコツ

①特定のテーマに関する文献は「件名」で探す

「件名」、「ディスクリプタ」、「件名標目表」、「シソーラス」などが解説され、件名による検索が利用できるデータベースやできないデータベースが説明される。

②件名から検索する手順

ここでは、NDL-OPACの件名検索が説明される。

筆者注：残念なのは、図書の件名検索がこのNDL-OPACによって、はじめて可能になったことの意義が十分に述べられていないことである。それどころか、図書の件名検索であることさえ、説明されていないことである。

③キーワードを見つけるコツ

書名や論文名、キーワードでデータベースを検索するさいの注意点（同義語や論理演算など）が説明される。

筆者注：同義語や論理演算によるキーワード検索は、図書館の情報検索演習という科目で

レポート作成とレファレンス資料の利用

とりあげられるが、一般には知識として普及していない。せいぜい、いくつかの用語で検索してみる程度である。実際的な目的にはそれで十分である。そのことよりも、ここでは、雑誌論文を検索する方法を述べているという説明がほしい。それでないと、検索の一般的説明になってしまい、レポート作成者の関心から遠ざかってしまう。

F 他の図書館・情報機関の探索

→省略

G 情報の記録媒体以外の情報源

→省略

以上、段階2を要約してきたわけであるが、Bの筆者注で述べたように、「われわれは、今、レポートのテーマが決まり、文献を収集する段階にいる。どうして文献を収集するか、そのためにレファレンス資料をどう役立てるか、というのが、われわれの知りたい事柄である」。こういう立場からすると、上述の説明は、レファレンス資料の概説やキーワード検索の概説が途中で挿入されたり、文献カードの作成や文献の入手法がはいったり、また、「E 文献検索のコツ」が、いったいなにを検索しようとしているのか説明が欠落していたりして、要点が把握しにくい。

それで、以下、レポート作成という立場から、段階1および2の要点を説明してみることにする。

- テーマを決めたり、テーマの概略を知るには、レファレンス資料のうち、百科辞典や専門事典（また入門書）を利用するのがよい。
- 文献の種類はAにあるとおりでであるが、もっとも重要でありまたレポート作成の中心になるのは、図書と雑誌論文である。
- 図書の検索に関しては、NDL-OPACという、きわめて強力な武器が用意されている。⁴⁾
- 雑誌論文の検索についても、国会図書館のHPで公開されている。
- 文献案内については、組織的な方法としては、三次資料を利用する方法がある。
- 以上は、組織的な検索方法であるが、これと、「芋づる式」の方法を併用する必要がある。

3.4 段階3から段階5とレファレンス資料

段階3から段階5については、レファレンス資料の利用とはほとんど関係がないので、その項目を示すにとどめる。

段階3

「文献の入手」、「文献の評価」、「研究カードの作成」

段階4

「筋書きをまとめる」、「章立てを考える」

段階5

「下書きを書く」、「引用と著作権」、「注・引用のしかた」、「体裁を整える」、「レポートを仕上げる」

4. ま と め

さいしょに図書館情報学の立場から、レファレンス資料の形式的分類をとりあげ、つぎに、いわば図書館の現場の立場に立って、レファレンス質問の内容という視点から、レファレンス資料の分類をみた。最後に、レポート作成者の立場に立って、レファレンス資料の利用という問題を考えた。

それぞれの立場に立つことによって、専門的関心が発生し、展開してゆくわけで、また、逆に、それ以外の立場の見方が多少とも失われ、問題のある状況が現出するように思われる。

レファレンス資料の形式的分類の意義は、レファレンス資料を、書誌、索引、事典という基本的な分割を行なった点にあると考える。書誌とは、図書資料のリストであり、索引とは、雑誌記事のリストである。事典は、その主題にたいする予備的な知識を提供する。レポート作成を行なう者は、まず、事典でその主題にたいする予備的な知識をえて、それからさらに、図書や雑誌記事を探索してゆけばよいのであり、レファレンス資料の形式的分類は、レポート作成者の基本的必要にもとづいた分類であるということになる。

一方、レファレンス質問内容にもとづく分類は、レファレンスサービスという図書館の仕の内容と、それに回答するための資料という立場から構成された分類である。ここでは、利用者の一般的質問に回答することが主要な任務であると考えられている。つまり、特定のテーマを持ち、そのテーマに関する知識・文献を求めるレポート作成者の必要に対応する体制が不十分である。レポート作成者を支援することが、それほど重要な任務であるとは考えられていないようにみえる。むしろ、図書館職員は、レポート作成者がどのような行動をするか、その要求に応えるためには、どのような知識が必要か、という面では、(たとえば、大学図書館では)教員まかせにしてきて、そのことによって、自分たちの仕事の範囲をせまく限定してきたようにみえるのである。図書館職員が自分の仕事を限定したというより、図書館職員はそんな風には教育されてこなかったのである。

今後の課題として、図書館職員は、レポート作成者の基本的必要を理解し、その要求に応える力を身につけていかなければならない。どのような知識が必要であろうか。その中心は、主題ごとの主要事典の知識や文献案内の知識になると思われ、教育体系の整備も必要であろうし、専門家の協力も必要になるであろう。図書館員自身も、なんらかの分野のレポート作成者であることが期待されることになろう。

注と引用文献

- (1) 『図書館情報学ハンドブック 第2版』, 丸善, 1989.
- (2) 「案内指示的」という名称の奇妙さに注目していただきたい。文献によっては、おなじものを「書誌的資料」といつているものもある。このほうがよほど分かりやすい。
- (3) 「考えられる」というのは、そのことがどこにも明示してないからである。
- (4) 一次書誌として、世界書誌、全国書誌、販売書誌が挙げられ、二次書誌として、選択書誌、主題書誌、著者書誌、個人書誌、集合書誌、略歴付書誌、解題書誌が挙げられている(同, p261-262)。
- (5) 目録として、蔵書目録、総合目録、販売目録、新刊目録が挙げられている(同, p262-263)。
- (6) 「索引と抄録」は、記事索引、抄録誌、目次速報誌、叢書合集索引に分けられ、記事索引として、雑誌記事索引、新聞記事索引、会議録索引、引用文献索引、書評索引が挙げられている(同, p264-266)。
- (7) 特殊辞書として、古語辞書、新語辞書、外来語辞書、略語辞書、方言辞書、ことわざ辞書、引用句辞書、語源辞書、発音辞書、類語辞書、対訳辞書、多言語辞書、用語集、用語索引が挙げられている(同, p267-270)。
- (8) その他のレファレンス資料として、アルマナック・年鑑、年表、要覧、便覧、法令集、白書・青書、

レポート作成とレファレンス資料の利用

- 地名事典・地名索引、地図帳、図鑑、人名事典、名鑑が挙げられ、名鑑の種類として、名鑑の名鑑、人名録、会社録、団体録、が挙げられている（同、p 275-276）。
- (9) レファレンス資料の検索ツールとして、解題書誌、書誌の書誌、主題の文献案内が挙げられている（同、p 276-278）。
 - (10) おそらく、地名事典は地名をあつめた資料であり、年表は、年代と事件を並べた資料であるから、それぞれ、地理学の内容を集成した地理学事典、歴史の集成である歴史事典とは別種の資料であると考えられているのであろう。
 - (11) 木本幸子ほか編『改訂 レファレンスサービス演習』、樹村房、2004、p 102以下。
 - (12) 大串夏身編著『情報サービス論』、理想社、1998、p 95-96。
 - (13) 井出翁、藤田節子著『レポート作成法』、日外アソシエーツ、2003、p 7-12。
 - (14) たとえば、野末俊比呂“情報リテラシー”。『情報探索と情報利用』田村俊作編、勁草書房、2001などを参照。
 - (15) 井出・藤田、前掲書、p 46-55。
 - (16) 同、p 56-90。
 - (17) NDL-OPACで件名検索ができるようになったことは、つぎのような意義をもつ。すなわち、これまで日本の図書館界では、主題による図書の検索は、ほとんど日本十進分類によって代行されていた。すなわち、件名検索はほとんど行なわれていなかったといってもよい。しかし、NDL-OPACの件名検索の公開によって、はじめて、件名による図書検索が実質的に可能になったのである。すなわち、ある主題について、その主題にたいしてどのような件名が付与されているか、その件名で検索すれば、同じ主題の日本語の図書にどんなものがあるか、ほぼ正確といえるレベルで調べることができるようになったのである。そのためにはいくつかの前提条件が必要であった。信頼性のある件名標目表の存在、専門家による件名付与、全国書誌のデータベース化、件名検索のためのソフトウェア、インターネットによる公開、などである。

—平成20年10月31日 受理—